

子どもたちと学ぶ ー科学の目で描く植物画ー

田地川和子・貴島せい子・肥田 陽子（ひとはく連携活動グループGREEN GRASS）
高橋 晃（ひとはく研究員）・長谷川太一（ひとはくミュージアムティーチャー）

子ども植物画教室の始まり

植物画とは植物を科学の目で観察し描く絵のことをさします。科学と絵画の2つの要素を併せもつ絵といえます。GREEN GRASSは11年前に結成し、現在3人のメンバーで植物画の制作や、植物画に関わる活動をしています。人と自然の博物館は、地域の自生植物の標本収集だけでなく、植物画としても記録・收藏しており、GREEN GRASSもその制作に関わってきました。そのなかで、植物画を描くことを通して子どもたちが自然に触れ、関心を持つ機会を作れないかと話し合いました。そして2000年から、博物館の児童・生徒向け自然体験型プログラムの一つとして、小学1年生から中学3年生を対象にした「ミュージアムスクール 植物画を描こう」を一緒に始めることになりました。

教室は私たち自身の勉強の場

最初は3時間ほどの教室として、画材も花屋さんの園芸植物を描くことでスタートしたのですが、周りを豊かな自然に恵まれ、また植物の専門家がいる人博ならではの特性を生かした教室にしようと、回を追う毎により良い方向へ改めてきました。その結果、3時間が1日になり、さらには2日連続の教室へと充実されていきました。画材の植物は、前日に周りの里山などから20~30種類採集してきます。科学的な視点と絵画的な視点の両方から、季節に応じた子どもたちに魅力的だと思われる種類を選ぶのです。

じつはこの採集が一番大変ですが、よい作品を生み出すためにとっても大切な点でもあります。明日には子どもたちが生の植物に出会い、目を輝かせながら自分の好きなものを選ぶのですから。その喜ぶ顔を目に浮かばせながら頑張る植物探しをします。そして、その場での水切りと、博物館へ持ち帰ったあと再度水切りをします。これは植物画を描く時まで植物のいい状態を保つために欠かせない手順です。これらの作業を立場や経歴の違うみなで一緒に行えたのがとても勉強になることでしたし、楽しい時間でした。



教室の様子

子どもたち自身の手で描く

教室をうまく運営する上で重要なことは、子どもたちの集中力を途切れさせないこと、そして自分自身の力で植物を選び、観察し、描いてもらうことです。そのために私たちは、座席の順序や机の上の道具の配置からはじまり、観察の方法、デッサンの仕方、色の出し方まで、いろいろな工夫をしてきました。

当日は、まず子どもたち自身が描きたい植物を選び、教室の全体的な説明のあと、お母さんたちが退出して、いよいよ自分一人で制作にかかります。「見る」、「触る」、「匂う」、「味わう」、

「聞く」の五感を使ってよく観察すること、命あるように生き生きと紙いっぱいに描くこと、描いた線を濃い絵の具で塗りつぶさないこと、植物本来の色を作ること、実を切ったり、花をルーペで見たりして見つけたことを描くことなど、順を追って指導します。疲れたら、あめ玉を口に入れてみんなで一休みする事も、集中力を持続させる工夫の一つです。

私たちの役目は、科学の目と絵画の目、両面から話しかけながら、子どもたち自身の手による作品制作ができるように手助けをすることです。



作品制作中

感動と喜びにより身につく力

子どもたちはルーペでちがう世界を見たり、実を切って中を見たりするのが大好きです。「うわー！」と感動の声が上がります。花の色の美しさに感動する子もいます。この感動の気持ちこそ、絵を描くエネルギー源といえるでしょう。

朝、植物とはじめて対面した時から絵を描きあげるまでの2日間、子どもたちは多くのことにぶつかりながらも乗り越え、作品を完成させていきます。植物の真実を見抜く観察力、絵にする表現力、一つのことに没頭する集中力、描きあげる持続力や忍耐力。毎年通ってきている子たちをみると、確実に力を身につけて成長していることがわかります。

こう並べて気づくことは、これらが何事にも通用する大切な力だということです。子どもたちの自然とのかかわり合いを求めて始められた教室でしたが、予期せぬ喜びをもたらしてくれているように思います。

子どもたちは力を身につけるだけではありません。知るたのしさ、精一杯力を出すことの心地よさ、自分の力に気づくよろこび、継続することで得られる上達のうれしさ、きっとかれらはこのどれも感じているに違いないと思います。「あの子たちの2日間もの頑張りは一体どこから生まれるのだろうか？この目の輝きは？」といった私たち自身への問いかけに対する答えはこの辺りにもありそうです。

小さな一年生も、また中学生も年令それぞれにもてる力を出し切って、感動的な絵が生まれます。帰りには、描いた植物に愛着を感じるのでしょうか、大切にうれしそうに持って帰ります。



左から小学1年生、2年生、3年生の作品

子どもたちの将来への期待

11月のひとはくフェスティバルには毎年子どもたちの作品を展示してきました。立派に額装された自分の絵がスポットライトを浴びて並んでいるのを見て、子どもたちはちょっと恥ずかしそうでもあり、とても誇らしげでもあります。このような晴れの舞台は、かれらのがんばりに応えるご褒美であり、それがまたかれらの一層の成長に役だっていると思います。

全国の子どもたちがどんな絵を描いているのか、自分はその中でどうなのかを知ってもらう機会として、国立科学博物館主催の植物画コンクールへの出品も勧めてきました。作品制作の励みの一つになればという気持ちでしたが、応募すると自覚が生まれるのか、翌年から描画技術が目に見えて上達するという効果がありました。いまでは毎年何人かの子が入賞するほど、教室全体としてのレベルが上がってきています。

年々、新しい子どもたちがやってきてくれると同時に、小学低学年から参加してくれた子たちは中学生になり、まもなくこの教室から卒業していきます。植物画と共に育ったかれらが植物画での新たな活動の場を、ひとはくで見つけられることを心から願っています。